

令和8年度 体育部会研究計画

1 研究主題

学びをひらく 徳島の体育

— 子供の思いにそった「多様な挑戦」で運動の本質を探究できる授業づくり —

2 主題設定の理由

徳島県では、平成30年度以降、運動がもつ固有のおもしろさ、すなわち誰もが思わず夢中になれる価値に着目した「本質的なおもしろさ（本質的特性）」に焦点を当て、研究を積み重ねてきた。

加えて、この2年間は、「子供の主体性を育む体育学習」を主題とし、主体性を研究のテーマに掲げ、子供がどのような場面で主体性を発揮しているのか、どのような学び方をしているのかを見取り、主体性を発揮するための支援の在り方について研究を進めてきた。令和7年度小学校体育科教育研究大会（藍住北大会）では、「本質的なおもしろさ」に夢中になる中で、見通し、挑戦、振り返りの「学びのサイクル」が定着し、仲間と関わりながら主体的に学ぶ姿が多く見られた。また、ルーブリックやエピソード形式での見取りによって、子供の様子を把握し、適切な支援がなされたことで、子供の挑戦を支えていた。まさに、主体性が育まれていた授業実践であった。他の実践発表からも、「子供が自分なりに課題を見付け、考え、工夫しながら運動に関わる姿が数多く見られるようになってきた。」という報告があがり、主体性の研究は一定の成果を得た。

一方でこの研究においては、「本質的なおもしろさ」の世界の中で学習を展開するため、「記録への挑戦」や「技術獲得への挑戦」へと子供の意識が向かないように設定されていた。その結果、「タイムを縮めたい」「きれいなフォームで跳びたい」などの思いが芽生えてきた子供に対して、挑戦の機会を十分に保障できなかったといえるのではないだろうか。

そこで本研究では子供の挑戦が限定的な枠組みに縛られることなく、学びをひらくことで「多様な挑戦」を保障し、探究によって深まっていく学びを目指していく。そのためには、教師自身もこれまでの指導観や固定的な考えにとらわれず、子供の学びがひらかれていく学習の場を構想していくことが求められる。学びの場がひらかれているからこそ、子供一人一人の「多様な挑戦」の仕方が生まれ、それを探究することが学びをより深いものへと導いていくと考える。

こうした考えのもと、本研究では主題を「学びをひらく 徳島の体育」と設定し、深い学びを通して、子供の多様で豊かな可能性が開花していく体育学習の在り方を追求していく。

3 副主題設定の理由

(1) 運動の捉えなおし

これまでの研究で用いてきた「おもしろいコト」という言葉について、「それは本当におもしろいのか」「他にもおもしろいものがあるのではないか」といった声を耳にすることがしばしばあった。本来この言葉は、楽しさそのものを指すのではなく、「子供が運動に向かう中で、誰もが思わず夢中になり、試してみたくなる出来事」として表してきたものである。しかし、その意図が十分に共有されず、個人の感じ方や好みを表す言葉として受け取られてしまう場面も見られた。つまり、このような誤解を払拭するためにも、この言葉が指している意味をよりわかりやすい言葉で示す必要がある。

そこで本研究では、運動を「本質」と「条件」という2つの要素に分けて捉えることを提案し

たい。「本質」とは、「その運動であるために絶対必要なこと」である。例えば、ハードル走なら「障害物をまたぎ越しながらゴールまで走ること」がそれにあたる。これを変えてしまうと、もはやハードル走ではなくなってしまう。一方、「条件」とは、教師が工夫して設定する「場・ルール・用具」のことである。例えば、ハードルの高さや間隔、コースの数などがこれにあたる。つまり「本質」は変えられないが、「条件」は子供の実態に合わせて自由にえられる。この2つを組み合わせることで、子供一人一人に合った運動になる。それを、子供の挑戦の幅を格段に広げ、「多様な挑戦」を保障する教材として提示する。

※本研究において「本質」について整理したものを、一覧表^{*1}で示すこととする。

(2) 「探究」について

本研究で考える「探究」とは、これまでの研究で用いた「AARサイクルを回し続ける」ことと同じ意味である。：①やってみる（挑戦）②どうだったか振り返る ③次はこうしようと見通しをもつ（①～③を繰り返す）のように、自分で試し自分で気づき、自分で工夫するサイクルである。

例 Aさんの探究

1回目：ハードルを跳んで走る→「2つ目までいけた」→「最後までいきたいから高く跳んでみよう」

2回目：高く跳ぶことを意識→「最後までいけた」→「もう少し速くいきたいから低く跳んでみよう」

3回目：低く跳ぶことを意識→「速くなってきた！」→「スムーズにいきたいから遠くから踏み切ってみよう」

4回目：遠くから踏み切ることを意識→「リズムができてスムーズになってきた！」→「このリズムを保とう」

(3) 「多様な挑戦」について

① 運動領域

「多様な挑戦」とは、「技術獲得」や「競走・記録更新」「感じやリズム」などの挑戦に分類されると考えている。しかし、その挑戦は、運動の本質と切り離して捉えることはできない。上でも述べたが、本質とは、その運動をその運動たらしめている不変の骨格であり、これを変えてしまえば、その運動自体が成り立たなくなってしまう。この「本質」と教師が設定した「条件」を組み合わせた運動を、単元の初めに子供たちに体験させる。そして、「ハードル走って、こういう運動なんだ」と子供自身が受け入れることが大切である。子供が運動を受け入れて初めて「自分はこんなふう挑戦したい」という思いが生まれ、「探究」が始まるのである。

例えば「ハードル走」を例に挙げると、「スタートからゴールまで障害物をまたぎ越して移動する」ことが「本質」である。そこに、教師がハードルの高さや間隔、コースなどを工夫した「条件」を設定する。その運動を子供が受け入れることによって、「きれいなフォームでハードルを越えたい」という技術への挑戦や、「前より0.5秒速く走れるようになりたい」という記録への挑戦、「ターン・タ・タンのリズムで走りたい」というリズムへの挑戦など、様々な「多様な挑戦」が保障される。子供は、自らの挑戦を選び取り、そこから探究が始まる。

次に、ボール運動領域のような集団で行う運動では、これをどのように捉えていけばよいだろうか。これまでの学習では、「チームとしての課題」を共有し、「チームでどうするか」を考えることが優先され、その中で自分の役割を果たす学びが中心であったと考えられる。その結果、「自分はこうしたい」という個々の挑戦は、制限されてきたのではないだろうか。

そこで本研究では、子供がゲームに参加する中で、「自分はこうしたい」という個々の挑戦を見出せるようにする。例えば、ボール運動ネット型（バレーボール）では、「本質」である「落

とし合いの攻防」の中で、「一回も落とさない」「一点決めたい」「気持ちよく打ちたい」といった一人一人の思いが生まれる。そのような挑戦を実現していくためには、子供一人一人の思いの違いを当然のものとして受け止め、仲間と協働できるチーム形成が重要である。こうした個々の挑戦が大切にされる環境の中で、探究が始まる。

やってみて、ふり返り、見通しをもって、またやってみるという探究を通して、子供は自分なりに挑戦の意味や価値を見出す深い学びが実現されると考えている。

② 保健領域

保健領域の学習は、健康や安全に関する知識を正しく理解し、身に付けることに価値がある一方で、知識を覚えること自体が目的化しやすいという課題を抱えている。実際の生活場面では、健康や安全に関する判断は、状況や立場、考え方の違いに応じて選択し、行動していくことが求められる。そのため、保健領域においても、子供自身が問いをもち、考え続ける探究的な学びとして学習を更新していくことが重要である。

保健領域における探究的な学びとは、「より健康で安全に生活するためにはどうすればよいのか」という問いに対して、単に科学的知識を理解するだけにとどまらず、今持っている知識・資料・事例・対話を手がかりに「なぜ大切なのか」と考え続けることであり、一人一人が自分なりの判断や選択を更新していく学びである。すなわち、保健領域の学習の多くは、起こってから対処することを学ぶのではなく、よりよく生きるための予防の在り方を探究していく学びである。保健領域においても、多様な判断や選択、行動への機会を保障することが重要であると捉えている。これは、運動領域において「多様な挑戦」を保障する考え方と共通している。

例えば、小学校高学年の保健領域における「けがの防止」の学習では、「どうすればけがをせずに安心して生活できるのか」「自分たちの生活の中で、より安全に過ごすために工夫できることは何か」といった問いを起点に学習を進めていく。校内や通学路の様子、実際の生活場面などを基に考えるなかで、「見通しが悪く危険なところに看板を設置しよう」「見通しがよくなるようにあの木を切れないかな」のように、同じ場面であっても複数の判断や行動の選択肢があることに気づき、自分なりのよりよい行動を探究していく。

「心の健康」に関する学習では、「どうすれば心を健康に保てるかな」といった問いを通して、感じ方や考え方の違いを生かしながら、不安になった時にどうすればよいかという対処の仕方を探究する学びを構想する。こうした学びは、個人の問題として完結するのではなく他者との対話を通して、「そんな方法もあるんだ」と考えを更新していく学びである。

このように、保健領域においても、知識の定着を目的とするのではなく、子供が自分の生活や社会と結び付けながら、多様な判断や選択、行動を重ねていく学びを構成することで、運動領域における「多様な挑戦」と連動した学習の深化を図っていきたい。さらに、こうした探究的な学びを通して、子供の考えや感じ方が更新され、意味が再構成されていくことで、一人一人の学びが内面から深まる「深い学び」へとつながっていくことを期待したい。

4 研究内容

「本質」を探究するための「多様な挑戦」が生まれる教材づくり

副主題設定の理由でも述べたように、「本質」だけでは、子供の学びはひらかれない。教師が子供の実態に応じて適切な「条件」を設定することによって、初めて「多様な挑戦」が生まれるのである。そこで本年度は、「条件」に焦点を当て、「本質」と一体化した教材づくりの研究を進めていく。

ここでいう「条件」とは場やルール、用具など、授業を行う上で教師が意図的にデザインする環境である。「本質的なおもしろさ」の研究では、「連続跳び箱」や「サークルリレー」といった場、ネット型ゲームにおける「キャッチあり」のルールなどを設定することで、子供が「おもしろいコト」により夢中になれるような教材がいくつも紹介された。跳び箱運動の実践に目を向けてみると、「連続跳び箱」の場をいくつも設定することで、子供が何度も跳び箱を跳び越えて挑戦している姿が数多く見られた。しかし、本研究においては、場の設定が限定的である場合には、必ずしも子供の「多様な挑戦」が保障されないと考えている。また、教材づくりの目的は、「多様な挑戦」の保障だけにとどまらず、探究を通して深い学びを実現することにある。そのため、「条件」を設定する際には、その運動においてどのような深い学びの姿が生まれるのかをあらかじめ想定する。そして、それが実現するような「条件」はどうすればよいか研究する。

また、保健領域においても、子供が問いをもち、考え続ける探究的な学びへとつながっていくには、どのような教材を設定しなければならないのか。設定された教材を子供自ら学ぼうとする際、どのような「条件」が必要なのかを、検討していく必要がある。

今年度は、子供の「多様な挑戦」を保障し、探究を通して深い学びへとつながっていくような教材が数多く提案されることを期待したい。

5 研究方法

(1) 研究大会において

- 本年度は研究主題及び副主題の解明に向け、郡市研究会、「第64回中・四国小学校体育研究大会（香川大会）」において研究成果を発表する。

(2) 各郡市部会において

- 研究主題及び副主題の解明に向けて、授業研究会及び研修会を行い、研究成果をまとめる。
- 研究会や研修会に自主的に参加するとともに、各郡市で取り組んだ研究内容の共有を図る。

(3) 各校において

- 体育主任・体育部員を中心に、運動の本質を探究する中で子供の「多様な挑戦」が生まれる授業づくりについて考察する中でどのような深い学びが実現されたのかを把握していく。
- 年間カリキュラムのもと単元学習の実施及び副読本の積極的な活用を通して、子供の主体的・対話的な学びを図り、運動好きの子供を育成し、体力や運動能力を一層向上できるようにする。
- 研究領域・研究学年については、提案発表郡市が決定次第示すこととする。

<参考文献>

- (1) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 体育編」、東洋館出版社、2018
- (2) 文部科学省、「小学校学習指導要領解説 総則編」、東洋館出版社、2018
- (3) 中央教育審議会、「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」
文部科学省、2024
- (4) 徳島県小学校教育研究会、「令和8年度 徳島県小学校教育研究会 研究主題」
徳島県小学校教育研究会、2025
- (5) 徳島県小学校体育連盟、「第66回徳島県小学校体育科教育研究大会 研究紀要」
徳島県小学校教育研究会体育部会、2025
- (6) 松田恵示、「『遊び』から考える体育の学習指導」、創文企画、2016
- (7) 梅澤秋久、苫野一徳、「真正の『共生体育』をつくる」、大修館書店、2020
- (8) 平野朝久、「はじめに子どもありき」、東洋館出版社、2021
- (9) 白井俊、「OECD Education2030 プロジェクトが描く教育の未来」、ミネルヴァ書房、2020
- (10) バーナード・スーツ、「ギリギリの哲学—ゲームプレイと理想の人生—」、ナカニシヤ出版、2015
- (11) ヨシタケシンスケ、「そういうゲーム」、株式会社 KADOKAWA、2024

<参考資料> 運動の「本質」 一覧表

領域		本質
体 つ く り	体ほぐし	心と体への気付き
	多様な動き	身体 の 操 作
	体の動き	
器 械 運 動	マット	手をついて、回って元に戻る移動
	鉄棒	上がって何かして下りる移動
	跳び箱	手をついて跳び箱の向こう側への移動
陸 上 運 動	短距離走	スタートからゴールまで走っての移動
	ハードル	スタートからゴールまで 障害物をまたぎ越しての移動
	リレー	スタートからゴールまで バトンをつないでの移動
	幅跳び	前方へ跳んで着地
	高跳び	上方へ跳んで着地
水泳運動		水の中での移動
ボ ー ル 運 動	ゴール型	ゴールをめぐる攻防
	陣取り型	
	ネット型	落とし合う（抜き合う）攻防
	ベースボール型	塁をめぐる攻防
表 現 運 動	表現	イメージを表現する
	リズムダンス	リズムに乗って表現する
	フォークダンス	音楽に合わせて踊る
保 健	健康な生活	身近なことについて予防・対処をする
	体の発育・発達	
	心の健康	
	けがの防止	
	病気の予防	